2024年2月1日

セミナー通信　Ｖｏｌ．344　西村セミナールーム

主宰　西村　恵子

友情　2022年度卒塾生より

「双子みたいだなあ。」・・・Ｓちゃんと Ｙちゃん、二人が並んで笑い合っている姿を見るたび、私は密かに思っていた。顔は全然違う。でも背の高さをはじめとした体格はそっくりだった。着てくる服も、打ち合わせなどしているはずもないのに似ていることがしょっちゅうあった。常にアンテナを高く立て、周りにいっぱい気を配る繊細なＳちゃんと、周りはそれほど気にせず明るく天真爛漫なＹちゃん。一見正反対のようにも見えるのだが、授業の前後には学校のこと、受験のことなど会話に花が咲いていた。屈託なく笑っている二人はほほえましかった。

Ｓちゃんは小６からの入塾。一つ一つのことに誠実に向き合って、一つ一つ超えていく女の子だった。人をまっすぐに見る。心の奥底まで見透かすようなまなざしをいつも向けてくれていた。松蔭を目指し始めたのは中２の冬からだった。明るくて自由な校風に憧れ、中３の秋には見学に行って、「女子サッカー部に絶対に入部したい！」と、強く思うようになった。足りない偏差値と内申を上げるための必死の闘いが始まった。中３の秋の模試では合格可能性２０％だったが、全力で取り組んだ結果、冬の模試で６５％まで上げ、受験直前には８１％まで上げた。

Ｙちゃんは中１からの入塾。初めはなかなか授業に慣れなかった。一度も塾に通ったことがなかったので戸惑っていたのだ。それでも誠実に努力を積み重ね、成績も実力もぐんぐん上げていった。Ｙちゃんのすばらしいところは、アドバイスを受け入れて、“良い”と言われたことは何でも実行するところと、分からないことはとにかく恥ずかしがらずに誰にでも聞いて解決していくところだった。素直なのである。周りからどう見られるかなんて一切気にしない。分からないから教えてもらう、ただそれだけだった。そんな素直さで内申は４４まで伸びた。

二人に共通していたのは“一途さ”と、自分の心の声に従って進んで行こうとする素直さだった。今、二人は松蔭高校と春日井高校にそれぞれ通い、充実した高校生活を送っている。

友達とは、たとえ離れていても、たとえ数年に一度しか会えなくても、その生き方を尊敬し、信じられる大好きな相手のことだと私は思っている。人生で最も多感なこの時期、上を目指してともに頑張り励まし合った日々、苦しい受験を支え合いながら乗り越えた先の笑顔、全てが宝物だ。中学の３年間、塾で一緒だっただけかもしれないが、かけがえのない友情が生まれることもあるだろう。別々の高校に進んだが、お互い前を向いていることは分かっている。

「きっとＹちゃんなら頑張る。」「きっとＳちゃんも頑張っている。」“**だから私もここで全力で頑張ろう！**”はじけるような明るい笑顔とともに二人の声が聞こえるようだ。